

9. 七浦に伝わる伝統アマメハギ

青山 十也

1. はじめに
2. アマメハギについて
3. アマメハギの実際の様子
4. 七浦でのアマメハギの変化
5. 七浦地区以外のアマメハギ
6. 考察
7. おわりに

1. はじめに

私は文化人類学の実習において七浦地区を訪れることが決まった際に、あらかじめ文献でアマメハギの存在やその概要については知っていた。しかし実際に七浦地区に行くと、住民の方のお話を聞いていると、アマメハギを行う人材が年々減っていて、一時は中断していたが、なんとか今は行えていることや、住民の方たちがアマメハギに対してどのような思いを持っているかなど、実際の七浦地区でのアマメハギについて新しい情報がたくさん入ってきた。話を聞いているうちに、七浦の人たちが苦勞しながらも、毎年行っているアマメハギという文化の意義や変化などについてもっと知りたいと思ったため、調査をし、この場を借りて私が知ったことや感じたことを記述したいと思う。ここでは、主に文献や七浦地区での聞きとりをもとにアマメハギについて述べたいと思う。

2. アマメハギについて

アマメハギは能登地方で正月から節分にかけて行われるもので、いわゆる「小正月の訪問者」に分類される行事である。門前町では皆月と五十洲に伝承されており、国の重要無形民俗文化財に指定されている。2016年には国の文化審議会でユネスコの無形文化遺産として提案されることが決定し、2017年11月に行われるユネスコの委員会で正式に認定するかどうかが決まる（『毎日新聞』2016年2月18日）。

アマメとはイロリに長時間あたっているとできる赤い斑点のことであり、それを剥ぐようなしぐさをすることからアマメハギという名前が付いた。アマメハギは、小正月の特定の日に、面をかぶった者（アマメハギ）がスリコギを持ち、家々を訪れては人々のアマメを剥いていくという意味をもつ行事である。1996年時点では輪島市赤碕町、鳳至郡門前町、輪島市大野町、輪島市輪島崎町、輪島市河井町、珠洲郡内浦町の各地域で行われていたが（『七浦民俗誌』1996年）、皆月在住のBさん（男性、80歳）によると現在能登では七浦地区以外ではアマメハギは行われていないそうである。

アマメハギには2つの意義があり、1つは天狗（実際には天狗の面を付けた人）が神

様の代理としてその家を清めること、もう1つは「ジジ面」「ババ面」が「なまぐらの奴がアマメをつけているのをそぎ落とす」ことである。アマメをつけているものは怠け者とされていたことから、いろりのない家庭の多い現在でも怠け者を戒めるという意味も込めて行っており、子供を脅すことで子供の親が「後で悪いことした時でも面様呼ぶと言うたら聞く」というように戒めの効果もあるらしい。しかし現在ではアマメハギの時に子供のいる家はあまり多くなく、神事としての意義がほとんどとなっている（『七浦民俗誌』1996年）。

2.1 アマメハギの役

皆月のアマメハギ

天狗 1人 烏帽子に天狗面を付け、白髪を長く垂れ、黄色い狩衣を着て、刺し子姿で御幣を持つ。

ガチャ 2人 鬼面とも言い、阿と吽の口を開けた面と閉じた面があり、口を開けたガチャ面はノミと金槌を持ち、口を閉じたガチャ面は大きなスリコギを持ち、緑色の麻で作った小袖を着る。袖には白く右側に「あまめはぎ」、左側に「皆月日吉神社」と書かれてあり、灰色の括袴をはき、茶色の脚絆を付け、白足袋をはく。

サル 1人 猿面を付け、衣装はガチャ面と同じで、餅を入れる白地の大きな袋を持つ。

五十洲のアマメハギ

天狗 1人 日本手拭を頬かぶりにし、天狗は朱色で鼻の高い天狗面に烏帽子をかぶり、薄黄色で唐模様のある狩衣を付ける。

ジジ面 1人 同じく日本手拭で頬かぶりをし、薄水色の小袖のようなものの上に鎧、兜（五十洲地区に昔から伝えられてきたもの）を付け、黒ずんだ茶色の面は眉が太く、目は大きく見開いた様相をし、獅子鼻で口を吽に閉じ、頭に兜をかぶり、灰色の括袴をはき、手にノミと金槌を持ち、素足に下駄をはく。

ババ面 1人 日本手拭で頬かぶりをし、目は大きく見開き、歯をむき出した面をかぶり、麻で作った白髪を頭から長く垂らした恐ろしい様相をし、衣装は青地に白十字の模様のついた小袖を着、白色の括袴をはき、手に40センチほどのスリコギを持ち、素足に下駄をはく。

餅持ち 1人 普段着を着ている。餅を入れるための「コイドラ」呼ばれるフクロを持っている。

道案内¹ 1人 普段着を着ていて、正面に「五十洲壮年会」と墨書された提灯を持っている。

比較してみると、皆月はガチャ面が2人で阿吽の面に分かれているのに対し、五十洲はジジ面、ババ面が1人ずつと2種類に分かれているが分かる（実質ガチャ面も2種類

¹ 『七浦民俗誌』（1996年）には記載があるが、『門前町の祭り』（2004年）にはないので、道案内はなくなった可能性がある。

のようなものだが)。また、『門前町の祭り』(2004年)に載っている写真や、皆月の面は途中で1度新調したという B さんからの話から分かるように、皆月の方の衣装の方が新しくきれいに見える。なお、皆月のお面は金沢の能面づくりの職人さんに頼んで作ってもらったもので、天狗面は市販で売っている天狗の面を使ってもよい(『門前町の祭り』2004年)。

3. アマメハギの実際の様子

3.1 皆月のアマメハギ

平成 16 (2004) 年時点では皆月のアマメハギは 1 月 6 日に行われていたが、現在では 1 月 2 日に行っている。地区での子供や若者の数が減り、外に出た大人が子供を連れて帰ってくるタイミングとアマメハギを行う若者が帰ってくるタイミングとずれてしまうので、6 日から 2 日に変更したのである (K さん、皆月、男性、35 歳)。

皆月のアマメハギでは、まずアマメハギの実施について当日に行われる青年会の総会で話し合うそう (M さん、皆月、男性、32 歳)。そして社務所 (神主の家) に青年会が午後 5 時ごろに集まり、お祓いを受け、神主からの注意を受け (主にまわる家でのお祓いの仕方など)、天狗の者に天狗面と紙幣が渡され、御神酒を頂いた後、2 組に分かれて出発する。以前はアマメハギ一行が歩く前に、子供たちが大きな声で「アマメサマごぞった。餅 3 つ出えとけや」と触れて歩いていたそうだが、子供たちの数が減っており、現在では行われていないと思われる。

皆月のアマメハギでは、その年の忌中の家を除いて各家を回り、家へ入るときは無言で入るのだが、それについては神様だから無言で入るといわれている。猿面が戸を開け天狗を先頭に、ガチャ面、猿面の順に入る。家へ入るとガチャ面は右手に金槌、左手にノミを持ってコンコンと叩きながら面を相手の顔に近づけ、もう一方のガチャ面は大きなスリコギで床を打ちながら、同じように面を近づけておどす。猿面も同様におどす。子供のいる家では、「怠け者はおらんか」、「言うこと聞かんもんはおらんか」、「勉強するか、せんか」などと言いながらおどす。この時子供たちは、親にしがみついて泣き叫んだり、「言うこと聞かから、かんにんして」などと泣いて謝ったりする。こうしておどし終わると、天狗はその家の神棚に向かってお祓いをする。お祓いは簡単なもので、2 礼 2 拍手 1 礼した後に払い棒を 2~3 回振るようなものだそうであると (O さん、鶴山、男性、50 歳)。お祓いが終わると、家の主人が用意してある餅 3 つを天狗に渡し、天狗は猿面に餅を渡すと猿面はそれを大きな袋に入れる。こうして餅を貰うと、入ってきた時と同様に天狗を先頭に出ていく。

このようにして 1 軒 1 軒を順番に回り、午後 9 時半ごろに社務所へ帰って飲食をして終わる。なお、アマメハギへの参加はボランティアで手当は出ないそうである。

3.2 五十洲のアマメハギ

五十洲のアマメハギは、現在では家を回らずお祓いの形式だけとなっているが、ここ

では家をまわる形式を行っていたころの記述をする。

五十洲のアマメハギも昔は1月6日に行われていたが、人口減少のために1月2日にを変えて実施していた。理由は皆月と同様である。昔はアマメハギの前日の午後、村の壮年会の役員が集まって役を決めたり、準備について話し合っていたが、壮年会の組織がなくなってからは、五十洲区の役員が正月1日のお宮参りの時に集まって、帰郷している若者を調べて役（ジジ面、ババ面、天狗）を決めるようになった。

五十洲のアマメハギではまず、メンバーが区の集会所に集まり、面や衣装の着付けを済ませる。昔はアマメハギを行うメンバーがすぐ変わって、着付けができない人がいたため、大人の人にやってもらっていた（映像『あまめはぎ 門前町五十洲』1998年）。午後6時ごろアマメハギ一行の天狗、ジジ面、ババ面と袋を持つ餅かつぎ3人が五十洲神社に行く。神社に着くと拝殿で神主からお祓いを受ける。お祓いをする神主は皆月と同じである。その時、ジジ面、天狗、ババ面の順に右から1列に並び、区長、区の役員、村の古老が参列する。お祓いが終わると、神主が使った御幣を天狗に渡す。その後、御神酒が出て皆で頂く。

神社での神事が終わると、一行は区の役員3人が提灯を持って道案内をしながら、村の東の端から1軒ずつ、その年忌中の家を除いて順に回る。家に入るときは、まず提灯を持った区の役員が入り、「じゃまもんがきんした」、「なんだいもんがきんした」などと言って、その後に天狗、ジジ面、ババ面、餅かつぎの順に入る。子供のいる家では、ジジ面は、左手にノミ、右手に金槌を持ち、顔を近づけながらおどす。ババ面はスリコギを持ち、腰をかがめ床や囲炉裏の縁を叩きながら子供らをおどす。天狗は神棚の前に座り、ジジ面とババ面がおどし終わると、家の主人が餅を2つ袋を持った餅かつぎに渡す。餅をもらうと天狗はお祓いをしてその家から出る。このお祓いも神主が同じ以上、皆月と同じようなものが行われていると思われる。

このようにして各家を回り終えると集会所へ帰り、飲食をして解散する。五十洲では、翌3日の午前10時ごろから「餅ホービキ」という行事が行われる。アマメハギで集まった餅を使って、当たり付きの糸を引き、当たった人は餅がもらえるという行事である。現在のアマメハギでは家を回らないため、なくなっていると思われる。

皆月と五十洲のアマメハギを比べてみると、お祓いや、忌中の家は回らないといった作法は同じだが、昔の五十洲のアマメハギは、皆月より一軒一軒にかかる時間が長く、騒がしかったようである。これは、五十洲のほうはジジ面、ババ面がおどすため、長い間子供を追いかけ回していたことや、平成2（1990）年に起きた、アマメハギの最中の出来事の原因が五十洲と皆月でのアマメハギの行事のあり方の違いにあったということからも判断できる。しかし平成10（1998）年の五十洲のアマメハギは黙って金槌でノミを打ったり、顔を近づけており、そこまで騒がしいという印象は受けなかった。皆月も五十洲も、アマメハギで面を付けているのは男性のみとなっている。理由としては、男性の方が迫力があって、おどす上で都合がいいからだと思われる。また、皆月では渡

す餅は3つだが、五十洲で家を回っていたころは、2つという記述があり（『門前町の祭り』2004年）、みかんが付いている家もあった。また、皆月では無言で家に入っているのに対して、五十洲では案内人が一軒一軒挨拶をしていたようである。昔は高校生なども参加していたので未成年が御神酒を頂くときは、飲んだふりをし、成人した人はお面をとって飲んでいて。アマメハギを行うのは、正月ということもあって、上着などを着ることのできないアマメハギの天狗や他の面を付けている人たちは非常に寒そうだった（映像『あまめはぎ 門前町五十洲』1998年）。

4. 七浦でのアマメハギの変化

アマメハギが七浦地区でいつ始まったか、皆月と五十洲どちらから始めたのかは不明であり、アマメハギが始まった理由についても、昔日本に外国人が漂流して、民家を訪ねた外国人を見た家の人が驚いて、恐れたことが発祥といった説があったりするが、正確には分らない。少なくとも現在の皆月や五十洲の人が子供のころからはアマメハギが行われており、初めは神社とは関係ないために神事は行っておらず、好きな服や面をかぶって家を回っていた（Nさん、五十洲、男性、70歳）。

4.1 皆月のアマメハギの変遷

皆月在住のBさんからの情報によると、アマメハギを行う人は最初は厄年の人と決まっていたが、時間が経つにつれ皆月から若い人が減っていき、厄年の人から消防団の若い人、消防団の若い人から青年会の役員という風に変わっていき、現在に至る。アマメハギはもともと神社と関係していなかったため、面や服の着付けは別の場所で行われており、日吉神社でお祓いをすることもなかった。しかし、昭和40（1965）年ごろに一度アマメハギを行う若い人が十分に集まらず、中断してしまう時期があり、それでもアマメハギを行いたいと思った区の人たちがアマメハギ保存会を作ることにして、その際に神主であるB氏の家を集合場所にしたことから、B氏がアマメハギ保存会長となり、それならアマメハギを神事にしてしまおうということでお祓いなどが行われるようになったそうである。その後、青年会の役員がアマメハギの担当をするようになったため、青年会がアマメハギ保存会の役員も兼任しているようだ。

また、アマメハギの回り方も昔は1つにまとまって回っていたが、それでは時間がかかりすぎて、後の方が深夜に騒いで回ると迷惑ということもあって、現在は皆月川から西町方向と本町方向に2班に分かれて回っており、夜の9時半には終了するという。猿面に渡す餅も、昔はアマメハギのために餅をついてそれを渡す人が多かったそうだが、現在ではそのような人はおらず、市販の餅やお金などを渡す人がほとんどだそうで、お金は青年会への駄賃の意味も込めて渡していると皆月在住のKさんは話していた。

皆月在住のBさんやMさんによれば、能登では他にアマメハギを行うところがないこともあって、石川県の旅館である加賀屋や、輪島市の保育所から依頼があり、アマメハギを行うこともある。さらには東京の方に呼ばれてアマメハギのイベントを行ったこ

ともあるそうである（M さん）。

4.2 五十洲のアマメハギの変遷

五十洲在住の N さんによれば、五十洲のアマメハギも皆月と同様、各家を回っていたが、現在はアマメハギを行う若い人がおらず、五十洲の神社で神事を行うだけとなっている。五十洲のアマメハギも、アマメハギが神事と関係する前から行われており、皆月で B 氏が保存会会長になってから五十洲でも B 氏を招き、お祓いなどをするようになったそうである。五十洲も皆月もアマメハギを行う日程が同じ日であるため、B 氏は皆月のアマメハギより早い時間の夕方に五十洲を訪れ、神事を済ませる。神事は、神社に集まって B 氏がお祓いをした後に、祝詞をあげて終わるようになっている。現在でもアマメハギで使っていた天狗面、ジジ面、ババ面、コイドラ（餅持ち）などの面は神社の蔵に保管されている。

4.3 アマメハギ全体の変化

アマメハギは囲炉裏にあたっている怠け者の人を脅す行事であったため、囲炉裏の縁をたたくようなしぐさが昔は行われていたが、現在囲炉裏が残っている家は少ないため、おそらく現在はコタツが囲炉裏の代わりになっていると思われる。

また、最近ではテレビやマスコミの影響もあって、アマメを剥ぐ、お祓いをするといった側面よりも、子供をおどす側面が目立ってしまい、子供をおどす行事だと世間からは思われがちである。実際に NHK でアマメハギについて放送された時も、小さい子供が泣いている家のところをピックアップしていた。

ユネスコ登録の件もあってか、もしアマメハギ関連が目的で訪れる人がいたときのために、何もないと寂しいので、アマメハギ関連のグッズやおみやげなどを作っておきたいとおっしゃる人もいた。

5. 七浦地区以外のアマメハギ

現在では、能登で七浦地区以外で行われているアマメハギは衰退してしまい、なくなってしまったが、ここではかつて行われていた時期の資料を参考に記述したいと思う

5.1 内浦のアマメハギ

珠洲郡市内浦町（現在は能登町）では昔は数か村で行われていたが、平成 4（1992）年時点では、秋吉と河ヶ谷という地区でしか行われていなかった。内浦では、立春の前日、節分の日に行っていた。秋吉では小学 3 年生から 6 年生の児童が数名ずつの組をなし、各家を訪問していた（七浦と比べるとかなり若い）。鬼の面は樺の皮、夕顔製のものもあるが、多くはボール紙の自製だった。鬼面はおそらく節分に因んだもので、蓑に深靴、サイケという酒を入れるための手桶、出刃包丁、木製の棒を持ち、「アマメー、アマメー」と大声でわめき戸を開け、土間に入り、「立春にいつまでもアマメをつけておるな」「親の言うことを聞け」などとおどすものだった。アマメは包丁ではぐようなしぐさをするらしい。内浦ではお金をもらって回っていたようで、もらったお金はサイ

コヅツという容器に入れ、家を回る際は、この容器を竹棒に4つの割れ目を入れたもので叩いて回っていたそうだ。集めたお金は宿で年齢によって分け合った(『祭礼行事 石川県』1992年)。

5.2 大野町のアマメハギ

輪島市大野町のアマメハギは部落の小中学生が行っていた。4部落ごとに別々に組を作り、組ごとに一団となって全部落を一軒ずつ巡訪するものだった。より近年に行われていたアマメハギでは、少年が少なくなり、高校生なども参加しており、クジによって役割を決めていた。役割は、神主、赤鬼、青鬼であり、神主は烏帽子・狩衣姿で御祓いを行った。赤鬼は鬼面を付け、赤色の素襖を着用し、赤色の袋をかつぎ、もらった餅を袋に入れ、青鬼は鬼面を付け青色の素襖を着用し、青色の袋を担いだ。

アマメハギの準備として、当日に定めの日宿に集合して、仮面の作成、祝詞の稽古、村に在住する神職から装束一式を借用した。ちなみに、面はボール紙を細工するものだったそうである。用意が終わると、午後4時ごろに揃って宿を出立し、神主役を先頭に赤鬼・青鬼以下列をなして巡訪する。まず玄関先で「アマメハギー」と唱えてから大戸から土間に入る。神主役が、2拝2拍手して祝詞をあげ、もう一度2拝2拍手する。家の主人が「ご苦労様」と挨拶して丸餅あるいは米等を出せば、鬼が受け取って袋に入れる。こうして家を回っていき10時過ぎごろに終わる。もらった餅は宿で料理してご馳走を作り、会食をした後に宿泊をしていたそうだ。翌朝に同じく餅を中心とした朝食をとり、装束を神職家へ戻して返礼に餅を若干贈り、最後に残った餅を部落の餅お講に出して終了となった。

5.3 その他のアマメハギ

内浦や大野町以外にも行われていたアマメハギとしては、若衆が村を回って、貰った餅を売って神社の費用にあてていた三谷町のアマメハギや、ケヤキの皮の鬼面をかぶり右手に包丁を持ち、家に入って「アマメンヤー」と一同が叫んで鬼面をつきだし、餅を出せと強要して家の主人が丸餅を人数だけ出せば、黙って受け取って立ち去るという深見町のアマメハギがあったそうだ。また、輪島崎市と河井町においては、1月14日に面様年頭とよばれる行事があったが、これも昔はアマメハギとも呼ばれていたそうである(『門前のアマメハギ』1981年)。

新潟でもアマメハギが行われており、村上市ではお祭りでアマメハギに選ばれた子供が、天狗面や獅子頭の格好をして家々を回り、団子などをもらい、夜は代籠りをしたそうだ。

5.4 各地域のアマメハギを比較して

アマメハギのあり方は地域によってかなり違いがあり、輪島市では1月6日に行われること(皆月や五十洲もかつては1月6日)、面をかぶって各家を周り、餅をもらってまわることは多くの地域に共通している。しかし、面の種類や衣服、持っているものの種類、貰った餅の利用の仕方、おどし方などには違いが多く見られ、その地域独自の

文化が目立つものとなっている。面は、七浦地区以外では鬼の面が多く、持ち物もノミと金槌ではなく包丁が多かったが、おそらくこれは、子供をおどす際により怖いものを選んだ結果だと思われる。面の素材なども、昔は木の皮などから作られていた地域も、時間が経つにつれてほとんどの地域がボール紙を使うようになった。アマメハギを行う年齢も若い人が行うという点は共通してはいるが、小中学生が行うところもあれば、高校生から成人した男性が行うところもある。アマメハギが行われる地域は、海に漂流した異邦の人が由来とされるように、海岸地域や比較的海に近い地域でのみ行われており、新潟で行われているのもそのためだと思われる（『門前のアマメハギ』1981年）。

6. 考察

私がアマメハギのことを調べていてまず初めに感じたのは、アマメハギは地域によって様態が様々であり、アマメハギ全体としての伝統よりも、その地域独自の伝統が目立つということである。そのため、どこが初めに祭礼行事にしたのか分からなかったり、掛け声のあるところもあれば静かに行うところもあったりで、アマメハギと言ってもいろいろなものがあるのは非常に興味深いと思った。また七浦では、時間が経つにつれ、日程を変更したり、渡すものにお金が入ってきたりと、変化に対しても寛容であると感じた。また、新潟では再びアマメハギを行い始めたことから、行う人やその地域の伝統さえあれば、実行可能な文化であるとも思った。また、アマメハギを行う上でその地域の住民の理解や協力は必要であり、それらが揃って初めて成り立つ文化であるのは間違いないだろう。

しかし残念ながら現在輪島市で行われているアマメハギは七浦の皆月と五十洲だけとなり、五十洲では家を回ることとはなくなってしまった。その衰退の主因はやはり地域の少子高齢化だろう。どの地域にも共通していることとして、アマメハギを行うのは若い人に限られており、子供や若者がいない地域では行うことができない。また、正月に寒い外を一軒一軒まわる作業は、高齢者には厳しい言えるだろう。皆月では、青年会の役員により現在もアマメハギを行っているが、現在の青年会役員が引退してしまうと（皆月の青年会は38歳まで）、その後アマメハギを行う人材が不足してしまい、存続はが難しくなるかも知れない。いままで多くの人が寒い中、中断する時期はあれど、苦勞しながらも行ってきた能登地方に伝わる伝統が、なくなってしまう可能性があるのだ。

アマメハギの今後について決めるのはその地域の人たちであり、今後アマメハギがどのような形になっていくのかは分からない。仮に行われなくなったとしても、今まで伝統として続けてきたのは確かであり、アマメハギという文化自体はこれまでも様々な文献に残っているし、忘れられることはないだろう。今後の七浦のアマメハギの可能性としては、存続する場合として、アマメハギの役員の幅を広げることが考えられる。門前町単位でアマメハギを行う若者を募集すれば、保存会のメンバーという形でアマメハギを行うことは可能だろう。また、伝統的なアマメハギのかたちが存続しない場

合でも五十洲のように、神社に集まって神事だけ行うという形がとられることも考えられる。今後という点では、もしユネスコの無形文化遺産に登録された場合、多くの人に認知されるようになるが、それによってアマメハギのあり方や意義も変化していくかもしれない。いずれにせよ、どのようなかたちになったとしても、七浦地区でアマメハギが今後どうなっていくのか、非常に興味深い。

7. おわりに

私が七浦地区の住人を何人か訪問して、アマメハギについて聞いてまわっている時、多くの人、特に皆月の人は自分が体験したアマメハギについてかなり詳しく話してくれた。それだけアマメハギは七浦地区の人にとってゆかりのある伝統であり、多くの人の記憶に残っているのだろう。私自身も話を聞いているうちに、七浦地区の人たちがなんとか続けてきたアマメハギは非常に価値のあるものだと感じるようになったし、今後もアマメハギの文化が受け継がれていってほしいと思った。最後になるが、今回の調査の中で急な訪問にもかかわらず多くの話を聞かせてくださった七浦地区の住民の皆さんに感謝の念を伝え、アマメハギについての報告を終えたいと思う。